

南半球便り（その 79）：クイーンズランド・ドリーミング

6月21日

豪州着任後1年半近くとなり、6つの州と北部準州のすべてに二回ずつ足を運ぶことができました。キャンベラの同僚大使が啞然とするハイペースです。先週から、いよいよ豪州巡り第三ラウンドに突入。その筆頭がクイーンズランド（QLD）州でした。

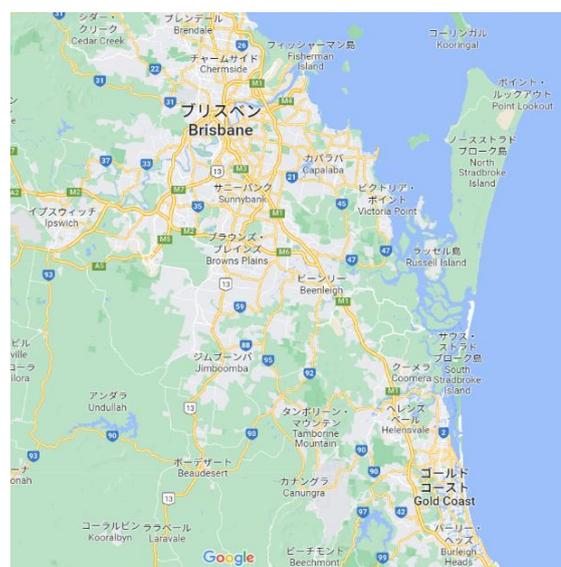


QLD 州（ゴールド・コースト）の街並み

1. サンシャイン・ステート

QLD 州の愛称は、サンシャイン・ステート。真冬でも陽光が^{さんさん}燦々と輝き、最高気温が 20 度を下回らないことで知られています。今年のキャンベラは異常な寒さで、朝晩は零下を下回る日が続出。先日は、最低気温がマイナス 4.5 度を記録しました。

冬のキャンベラは、基本的に快晴が続きます。ママズ・パパスが唄ったように、「all the leaves are brown, and the sky is grey.」ほど酷くないのですが、これほど寒いと温暖な日だまりが恋しくなるのが人情。足は自然と QLD 州に向かいました。今回は、州都ブリスベンと、豪州 6 番目の 63 万余の人口を数えるゴールド・コーストに行ってきました。



（地図データ ©2022 Google）

2. 日本とのつながり

ブリスベンでは、まず豪日協会とクイーンズランド日本商工会議所の招待を受け、QLD州を巡る日豪関係の現状と展望について講演をしました【スピーチは、[こちら](#)をご覧くださいいただけます。】

長年にわたり QLD州からは砂糖、牛肉、石炭等を輸出、日本からは自動車、機械類を輸出するという典型的な補完的貿易関係が築かれてきました。近年は、QLD州にとって日本は第二番目の貿易パートナーでしたが、今年4月に終わる一年間の数字を見ると、日本が最大の輸出先に。まさに「共に成長してきた」関係なのです。

コマツの流通センターを往訪して感じたのは、QLD州の炭鉱開発は、日本の商社による資本投入、エネルギー会社による長期にわたる持続的購入、建機会社による創意工夫なくして、ここまで成長しなかつただろうということです。私の背丈を遙かに上回る巨大なタイヤを擁するトラックが電子的に集中制御・運用されている有様を目の当たりにし、「ものづくり日本」のプライドと時代の変化への柔軟な対応力を実感しました。



コマツ流通センター（イノベーション・ハブ）



巨大なタイヤを擁するトラック

3. 不動産視察

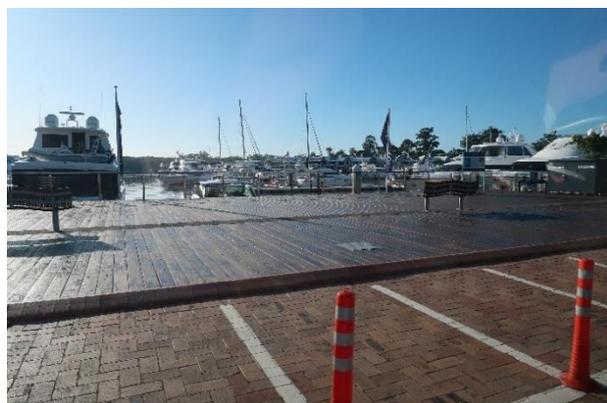
今回の出張で楽しみにしていたことのひとつが、ゴールド・コースト（GC）の不動産物件視察。というのも、2021年3月の前回出張時に、GC日本商工会の砂川会頭や地元の豪州人政治家から、「GCの高級ホテル、名門ゴルフ場、高級マリーナという3つの基盤的インフラは、すべて日本企業がまさに巨額を投じて短期間で一気に作った。」とのお話をうかがっていたからです。

その砂川さんのご案内で、バブル期に日系企業が大規模開発したサンクチュアリー・コーブ・リゾートやホープ・アイランド・リゾートを視察。さらには最近話題のホテル・コンドミニアムであるザ・スター・レジデンスを見学。その上で、サーファーズ・パラダイス展望台に一気に駆け上りました。40キロ以上も続く白砂の広大なビーチと、真っ青な空に突き抜けるように聳え立つ摩天楼のホテルやコンドミニアム群に息を飲みました。



GC日本商工会の砂川会頭と

高層階から見下ろす GC の街並みは、木々の緑と空、大海原そして入り江の青が織りなす目映いばかりのコントラスト。スプリンクラーの水が滴るゴルフ場とラグジュアリー・ボートが悠然と停泊するマリーナが屏風絵の如く展開。オーストラリアの底知れない富の力と、ゆとり溢れる生活の質の高さに圧倒されました。GC が放つ魅力と引力には、見る者誰しもが取り憑かれることでしょう。



GC のマリーナ



サーファーズ・パラダイス展望台からの眺め

元はと言えば、私はハワイ派で、若い頃はマウイ島へのリピーターでした。でも、今回じっくりと GC を視察してみて、一年間で晴天日が 300 日に達する温暖な気候、インフラの充実、治安、食事の質の高さ、オーギーの素朴で明るい包容力に接するにつれ、太平洋の遙か東方から上る朝日を全身に浴びながら、あの遠浅の砂浜をどこまでも歩いてみたいという衝動に駆られました。ガンメタ色の東京のオフィスなど忘れ去りたい方にとっては、格好の休暇やセミリタイアメントの地でしょう。

インフラといえば、GC を南北に繋ぐライトレール（路面電車）の敷設を支えているのが丸紅です。試乗しましたが、その清潔度、安全性、信頼性は、日本企業ならではの豊富な経験とあくなき緻密さに裏付けられていることがよく分かりました。車両内にサーフボード用のラックがあるのは、GC ならではのご愛嬌。GC 空港までの延伸が待たれます。



GC のライトレール

もう一つ心強いのは、日本の住宅メーカー（ミサワホーム）も進出していること。地元の住宅販売メーカーであるホームコープの株式を 51 パーセント取得し、住宅建設を倍増させています。安心して信頼できる快適な住宅に加え、やがては豪州人にウォシュレットなどの日本が誇る清潔、癒やしをも届けてほしいものです。

こうして見てくると、日本の多くの芸能人が GC に「隠れ家」をもっているとの話も納得がいきます。誰と誰ですか？もちろん、元インテリジェンス担当局長としては、地元の情報通からたっぴりと仕入れましたが、それは秘密です！（笑）

4. 日本語熱

これほど日本との関係が密な QLD なので、日本語学習熱も盛んです。豪州は人口当たりの日本語学習者が世界で一番多い国ですが、学習者の3分の1が QLD 州にいるのです。

GC 郊外のロビーナ高校を訪れましたが、日本語学習が盛んな同校ならではの「おはようございます。」という実にきびきびとした挨拶と太鼓演奏での歓待に感激しました。制服姿のオージーの高校生達が一列に並び、お辞儀までして私たち一行を出迎えてくれた姿を見た時、40 余年前の斜に構えた自分の高校生ぶりが思い起こされ、誠に新鮮に感じました。



ロビーナ高校の学生達

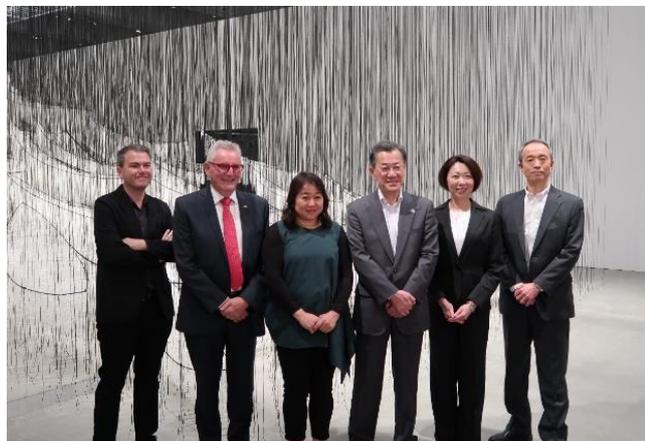


学生達の願い事と署名が入った手作りの絵馬

こうした日本への関心が底流にあるからでしょう。ブリスベンにある近代美術館では、塩田千春さんによる特別展覧会が6月から10月まで開催されます。開催直前のお忙しい時期に応援に駆けつけたにもかかわらず、数々の作品を丁寧に説明してくださいました。東京の森美術館でも66万人の鑑賞者を集めた塩田さん。糸をふんだんに使いながら、鑑賞者の記憶と想像を刺激する独自の世界をクリエイトした作品は、スペースに恵まれているブリスベンの地でこそ、さらに味わいと深みを増すことでしょう。

5. 日豪を繋ぐ野球

豪州では野球人口は決して多くありません。人気スポーツといえば、クリケット、AFL (オーストラリアン式フットボール)、ラグビー、サッカーといった土地柄。それでも、豪州出身の大リーガーは、36人に達する由。さすがは、スポーツ大国です。そういえば、阪神タイガースで活躍した投手のウィリアムズ選手も豪州人でした。



特別展覧会にて、塩田千春さん (左から3番目) らと

そこで、米国カリフォルニアで育ち、神戸製鋼でラガーとして活躍し、野球とラグビーの双方に詳しい弁護士のイアン・ウィリアム氏に招かれ、じっくり野球談義をしてきました。今年の11月には豪州代表が札幌に赴き、サムライ・ジャパンと一戦交えます。来春には、日本開催のワールド・ベースボール・クラシックに豪州代表が参加します。



視察したロビーナ高校にも、野球選手を養成するベースボールアカデミーがありました。篤志家のデニー丸山氏が寄付した「フィールド・オブ・ドリームズ」と称すべき芝生の球場で練習し、日本の強豪校・浦和学院や土浦日大とも交流を重ねています。オージーの球児にとっても、「甲子園」は憧れの的とうかがいました。



デニー丸山氏が寄贈した野球場で練習するロビーナ高校球児

オリンピックの野球では、日本が豪州に苦杯をなめたこともあります。先週、日本の後を追って豪州もワールドカップ出場が決まったサッカーに加えて、野球でも日豪が切磋琢磨する日々が楽しみです。

山上信吾